

HAPPY
HEALTHY



分析

本ワークショップでは、平戸の空間的特徴とその歴史的背景を合わせて扱った。また、市の社会経済的位置づけについても考察した。市の歴史的固有性や、修復の状態、現在の利用法も併せて地図に表した。最終的に、SWOT分析を行った。

空間的特性

平戸の中心部は平戸湾と北西に望む鶴ヶ峰丘の斜面、南東の亀岡城の丘の間に位置し、その地理的立地により特徴づけられている。

平戸のインフラは、湾の外形に沿う日本の線上の道路から成る。最近では、主要な交通は湾岸に沿って流れており、中心的な買い物道路は二次的な道路に変わってしまった。埋立地である市南部では、二次的な道がグリッド状に敷かれている。

湾岸は広い眺望を持ち、開けた特徴を持つ。更に、湾岸の埠頭には多数の駐車場があり開けている。幹線道路沿いの密集地域には二層・三層の建物が近接して建ち、都市的な特徴を持ち、町の南側にはより緩い都市環境がある。斜面は平戸で最も密度が低く、落ち着いていて緑豊かな特徴を持つ。

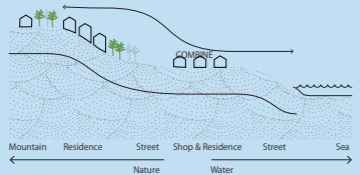
平戸の建築的特徴は日本の伝統的なデザインによりけっていつけられている。これは本通沿いの建物に最もよく現れている。長い敷地内で店と家を組み合わせたものであり、上品な木造軸組構造と白い漆喰塗りの壁を持つ。



航空写真



湾と丘をつながる道



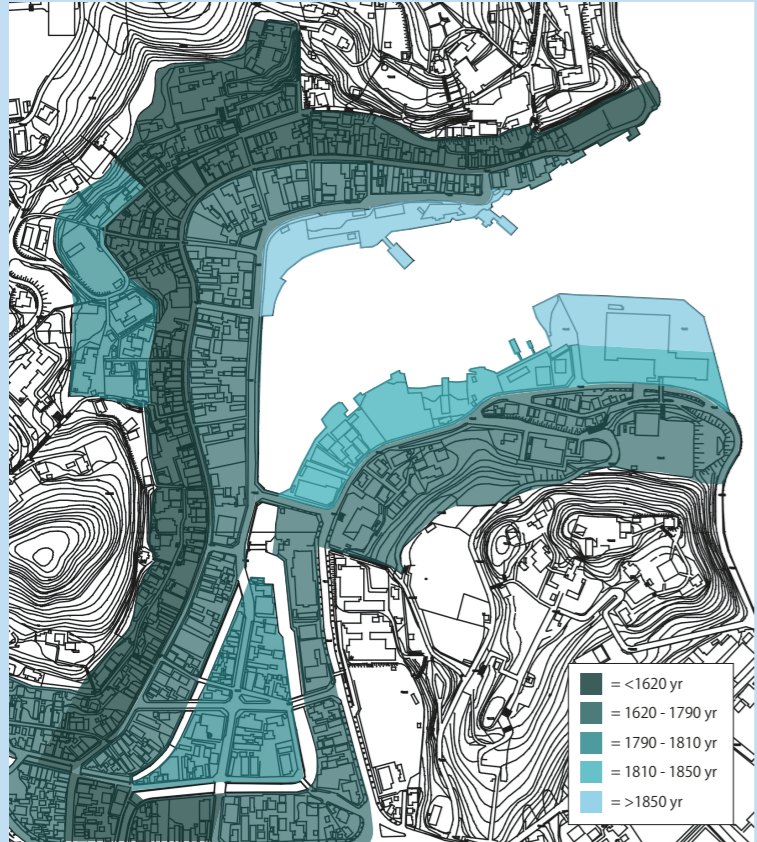
山への眺望



山への眺望



湾への眺望



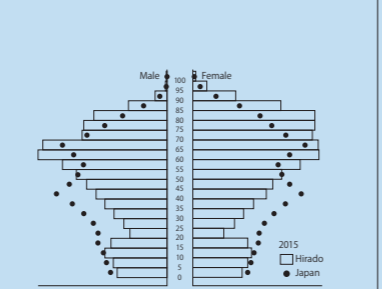
歴史的開発の地図

歴史的 특성

現在の平戸の町並みをもつ最大の特徴は、1621年にまで遡る、まちの最初の地図からも既に明らかである。そこには、今日の幹線道路を形作っている二列の家々が示されている。地図上には、1599年から1613年に松浦家によって築城され、その後取り壊された平戸城も確認できる。

平戸は、もとは漁村から始まったかもしれないが、奈良時代(710-794年)には既に交易の場として知られるようになった。鎖国の始まる1630年以前には、将軍に交易を許可された主要港であり、世界中から貿易商人が集まった。しかし1640年、将軍はオランダの建造物の取り壊しを命ずる。その頃から、オランダ東インド会社が出島に定着し、他のヨーロッパ商人は出島から追い出された。当時は反キリスト教政策が進められていたため、平戸藩主松浦隆信は親キリスト教であるとの疑いを掛けられぬよう、多くの寺社を建てた。

平戸は対外交易の盛んな地としての地位は失ったものの、通時的に拡大を続けていった。湾岸の建設用地の不足のため、人口増加による需要を満たすため平戸湾の埋め立てが進められた。



人口のピラミッド

社会経済的特徴

現在では、平戸の拡大はもう止まっている。むしろ、縮小しており、不動産の空洞化に対処する状態となっている。これは、人口減少と高齢化の結果である。

今日、平戸島には18000人の住人がおり、うち約8000人が同名の都市部にすんでいる。平戸の人口ピラミッドは日本全国の平均のものより極端な偏りを示している。これは、出生率の問題というよりもむしろ、人口流動によるものである。若い世代が平戸を出て、より良い雇用機会が見込め環境も整っている大都市へ流出してしまうのである。

平戸の産業は主に観光業・農業・漁業である。観光は日本人国内旅行者に大きく依存しており、心地よい亜熱帯性気候の島南部を訪れる東アジア人がそれに続く。有名な平戸牛は島の丘陵部全体で飼育されている。言うまでもなく、漁業は島を囲う広大な海で行われている。政治の中心地として、市はその他の経済活動をサービス業で創出している。同じ理由で、販売から小売まで、商業は比較的平戸の都市部に盛んである。にもかかわらず、こうした経済活動もまた衰退に苦しんでいる。

ポテンシャル

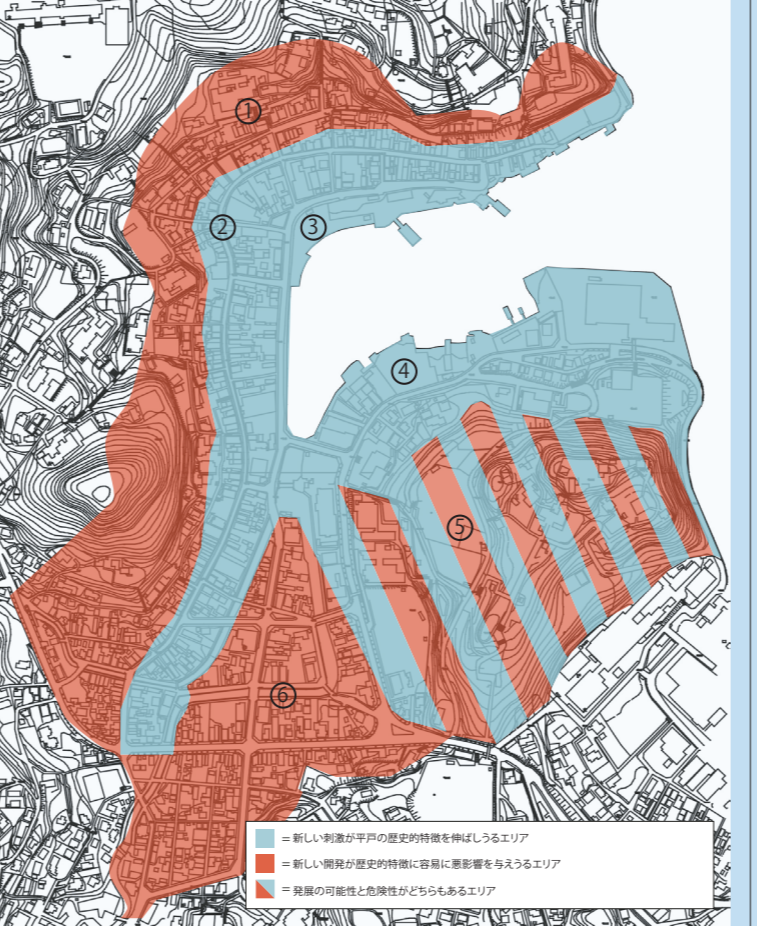
集めたデータをもとに、本ワークショップでは平戸の歴史的特徴を發展させる可能性を見出した。これらは、計画者に対する政策的助言となる。ワークショップではまた、修復の必要性も見積もったが、これらは空間的方針が定まって初めて有用となるため、ここには掲載していない。

發展の可能性・危険性マップ

平戸の最も大きな發展可能性は、自然資源と歴史的特徴に見出される。これらで持続可能な方法で活用することで、平戸は職・住・余暇の場としての魅力を保ち続けることができるだろう。

フレンドリーな人々や有名なローカルフードは、平戸の観光の魅力を高める。不動産が比較的安価で手に入ることも、若い世代を呼び込むのに一役買うかもしれない。

反対に、發展を拒むものとしては、人口減少と高齢化、それに伴う公共サービスの縮小化が挙げられる。加えて平戸は都市部から遠く、雇用機会も減っている。一方で、町並みは無計画な開発と駐車場の増加によりいとも簡単に壊されてしまう。



緑地帯 ①

幹線道路裏から上がる坂は、沈黙と瞑想の場所である。この雰囲気は住宅地であることと、上った先に信仰施設と神社があることによる。

この地区は、動的な湾岸と対をなすものとして考えるべきである。ここでは繊細なエリアであり、新規の開発により容易に悪影響を受けてしまう。この地区の特徴を維持することは、平戸の住環境を魅力的に保つ上で重要である。



緑地帯

築地町 新町 職人町 ⑥

市の最南端の地域は、静かな住宅地である。その都市構造は、グリッド状に組み込まれた道路網と、このエリアを横切る運河化された2つの川によりつくられている。

このエリアの空間的な質はそれほど高く評価されているわけではない。だが、新しい開発がなされればこの落ち着きは容易に悪影響されてしまうと思われ、改修程度に抑えるべきである。例えば、護岸の改修などをすれば、住環境の改善に繋がるであろう。



築地町

本通り ②

市の中心部に位置する主要な買い物道路は歴史的に平戸の背骨とされてきた。ゆえにここでは、商品やサービスの交換の場であると同時に、特に住人たちにとって、社交の場でもあった。

通り沿いの空き地は、能力のある若者たちが商業活動を始め、地域のニーズを満たす機会を与える。空き地や荒地を使えば、既存の文化をより目に見えるようにするデザイン的解決を図ることができる。

本ワークショップで提案したり・デザインの戦略は、空き地や比較的安価な土地を活用して新たなビジネスモデルを生み出すことを意図している。私たちは、一つの建物内で複数の事業を混在させるモデルが可能であると考えている。コーヒーショップは本屋を兼ね、上階ではヨガが行われる。異なる活動を複合させることで、それぞれ異なる興味を持つ様々な客層を呼ぶことができる。こうした複合は、起業家のリスクを軽減し、小規模ビジネスの早い段階での成功率を高める。小さな空き物件では、地域の事業者どうしが複合するよう刺激を受けるかもしれない。より大きな空き物件に対しては、起業家が投資しやすいような優遇措置が必要であろう。

平戸には福岡と対をなす商業地になりうる。両都市は相互に補完的な強みを持っている。平戸を居心地が良く安全で、少しだけゆっくりで心身に健康的な生活を送れる場所としてブランディングすれば、福岡から若い世代が移ってくるかもしれない。起業家たちはビジネスパートナー探しのために平戸への訪問を企画するかもしれない。大企業すらも、イノベーションを起こすための支社を平戸に設けることを考えるかもしれない。人々を混ぜ合わせ、彼らに刺激的な環境を与えることができれば、平戸は福岡にない付加価値を持つだろう。そうすれば、平戸は福岡の人々が投資をしたくなるような場所になるのではないか。



遊歩道を拡張する提案



駐車場を多機能広場へ



自転車をより多く、自動車より少なく

リ・デザイン

可能性・危険性マップは、發展のポテンシャルがある3つの地域を示している。本ワークショップでは、それぞれの地域に特定のリ・デザイン戦略を提案した。これらの地域への新しい刺激は、平戸の歴史的特徴についての将来的な見通しを与え、加えて周辺地域に新しい価値を加える。

城のある丘 ⑤

要塞として使われた丘と再建された城は余暇のための場所となる。斜面ではゆっくりと散歩をしたり自然を楽しんだり、素晴らしい眺望を堪能できる。この丘は發展の可能性と危険性を持ち合わせている地域だと考えるべきである。この空間の質を利用し、観光・余暇のための新しい刺激を加えることができるだろう。同時に、これらの新しい刺激は現在の特徴も補強できるかもしれない。一方、この丘に何かを新たにすることは、眺望に対して悪影響を容易に及ぼしうる。



複合的な活用法



古い建築と新しい建築の複合

新しいデザインが質を高める

ウォーターフロント ③④

平戸のウォーターフロントは市の入り口として考えるべきである。船や自家用車、バス、どの手段で来ようとも、この場所は訪問者がこの街の精神と初めて出会う場所となる。

ゆえに、湾岸の北側は、人々が車からバス、船から自転車、あるいはその逆というように乗り換える交通のハブとしてさらに發展しうるだろう。従って、この場所は人々が出会い、知り合う場所でもある。同様の理由で、湾岸の南側にも異なる環境と人々が出会う場所であり、娯楽や催し物、祭のために發展する可能性を秘めている。

今回提案されたり・デザイン戦略では、平戸の歴史的な中心地と湾岸とを繋ぐことが意図されている。私たちが提案するのは、遊歩道の湾岸全体への拡張である。この遊歩道は良質な歩行空間を作り出し、住人も観光客も、水際の質を体験することができる。

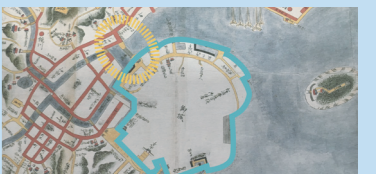
駐車場の数を減らすことで、私たちは水際の質を高める機会を作り出した。市場は複数の機能を提供する。この外部に開けた屋根は、朝には魚市場となり、週末にはアート展示、夏季には小規模の祭に使うことができる。その上、平戸の歴史的な中心地の活性化にも繋がるだろう。

湾岸の南側には、屋外イベントスペースを提案している。既存のドックは即興的なビーチとして使える。夏季になるとこの場所は、若者たちや家族連れが水際を体験できる魅力的な屋外空間を提供する。

要塞として使われた丘と再建された城は余暇のための場所となる。斜面ではゆっくりと散歩をしたり自然を楽しんだり、素晴らしい眺望を堪能できる。この丘は發展の可能性と危険性を持ち合わせている地域だと考えるべきである。この空間の質を利用し、観光・余暇のための新しい刺激を加えることができるだろう。同時に、これらの新しい刺激は現在の特徴も補強できるかもしれない。一方、この丘に何かを新たにすることは、眺望に対して悪影響を容易に及ぼしうる。

今回提案されたり・デザイン戦略では、史料館に新たなプログラムを加えて城の丘がもつポテンシャルを最大限活かせるようなものに向上させることを意図している。城に宿泊する実験(!)の後、城が訪問者にとって夜を過ごすのに魅力的な場所であることがはっきりした。城を小さなスケールのブティックホテルにできれば、平戸をアピールするユニークな資源になるだろう。宿泊室として再活用することに加え、私たちは庭で茶葉を育て、夜間の宿泊時間を伝統的な茶会で補うことも提案する。

屋外空間の一時的な利用は、学生のための設備と密接に組み合わせられて考えなければならない。私たちは、学生によるアートインスタレーションを毎年行うことを提案している。そうすることで、城の丘を現代的・歴史的な観点から体験できるようになり、地元住人と観光客を呼び込めるだろう。



平戸地図1810



城の丘からの眺望



余暇を發展させる提案



城の丘を植物園に



学生による恒年アートイベント

Colophon

歴史的特徴

この平戸保存・発展ワークショップは日蘭建築文化協会による招致により、平戸市文化交流課・都市計画課の協力を得て、2017年11月19日から23日にかけて実施された。本ワークショップの目的は、平戸の歴史的特徴の発展可能性を発見することであった。歴史的特徴はどのようにしてまちの現在のニーズに寄与することができるのだろうか？また、反対に、どのような刺激を加えれば、危機に瀕する歴史的特徴を維持するための土台と将来に対する視点を得ることができるだろうか？

専門家チーム

本ワークショップは、オランダ文化遺産局/RCE (Jean-Paul Corten, Gábor Kozijn) とSpace&Matter (Marthijn Pool) の主導のもと、日蘭建築文化協会/JNACA (川添善行, 塩崎太伸, 中川大起, 有井淳生, 安森亮雄, 塚越智之) と共同で行われた。

参加学生の所属大学は以下の通り：

佐賀大学 (大久保健太, ガクカホウ, 永山貴規, 池尻真人, 広谷洸多, 林田大晟) ・九州大学 (Esther Peralta, 王夢瑩, 下川裕樹) ・北九州大学 (馬軒) ・東京大学 (常松祐介) ・東京工業大学 (田中翔)

本ワークショップは、平戸車座組 (Remoc Vrolijk) に暖かく迎えて頂き、加えて駐日オランダ王国大使館 (Ton van Zeeland, Bas Valckx) に献身なサポートを頂いた。

オランダ商館

2011年、平戸オランダが再建された。この実現については様々な意見があるが、これにより平戸のまちの構造の失われていた原理が取り戻された。今日の街並みがもつ貿易港、すなわちオランダ東インド会社の拠点の典型的な特徴が再び目に見えるようになった。



本通りでの社交の可能性



城の丘は観光のためのポテンシャルを秘める



専門家チーム



再建されたオランダ東インド会社の倉庫



オランダ東インド会社の倉庫を囲う白壁

